

## 書評・紹介

Bibliothèque Nationale :

### Catalogue des Manuscrits chinois de Touen-houang (Fonds Palliot chinois)

平野 頌 照

「残るところはバリの国民図書館の敦煌古書であります、これも目下ギニヤール (R. Guignard) 夫人が鋭意調査中であります、やがて近い将来に完全な目録も出来、またその全部のマイクロ・フィルムも出来ることになろうかと思うのであります。もっとも現在はフランスにそういう計画のあることを聞いてはおろませぬが、今日の世界の趨勢から申しまして、わたくしは早晩そういう方向に動くことを確信いたしているのであります。」

と神田喜一郎博士が、かつて「敦煌学の近状」(敦煌学五十年・所収、筑摩叢書一六九)で、当時の学界の動向をふまえて語られた。博士のこの話は昭和三十五年のことであるが、それから十年の歳月をへて一九七〇年になって、往昔ペリオ (P. Pelliot) が敦煌からフランスにもたらした約六千点の文書の一部を調査し終り、漸やくカタログ第一冊として完成し発表したのがこの書である。

かえりみると、その十年の間に敦煌に関する研究は以前にもまして昂揚し、研究業績はもとより、世界に散在した敦煌文書が所蔵別に目録や写真など何らかの姿でつきつきに公開せられ、われわれに少からぬ裨益を与えてくれた。まさしく居ながらにして敦煌文書の様相を知るほどにまで発展してきている。(金岡照光著「敦煌の文学」大蔵選書七はこのことについて詳説してある。) それにもかかわらず敦煌文書の三大宝庫とまでいわれるものの一つ、すなわちパリ国民図書館は、こんにちなお敦煌文書全体の公開をかたく拒絶している。わずかに数人の学者を通してその一部を知るのみであった。ましてマイクロ・フィルム撮影など実現はまだ遠いさきの話になりそうである。このような状況のなかから本書が公開せられたことは、広く東洋学会にとつて慶事といわねばならない。それをわざわざ本学佛学会に寄贈されたのであるから、会員をはじめ敦煌関係の研究に従事するものはひとしく頻繁に利用して研鑽をかさね、学恵に報いることがのぞましいと思う。

さて本書の構成はつぎのように組まれてある。本書の内題の裏に、ずっと以前にペリオの敦煌文書をパリで調査した王重民の目録(「敦煌遺書総目索引」一九二六・商務印書館発行所収)と、J・ジェルネ (Jaques Gernet) および呉其昱の調査目録とを基本にして、R・ギニヤール(現在故人)の監督のもとに、R・セギ (Marie-Rose Seguy)、H・ヴェチ (Helène Vetch) の二女性がもっぱら本書の記録に従事したと説明してある。頁をあらためギニヤール夫人の序文があり、Trouville, Collec-

tion, Inventaires の順序で既発表の関連研究文献を世界各国にわたって網羅しつつ綴られてある。神田博士の「敦煌五十年」とあわせ読むと甚だ有益である。もともと神田博士のこの書(昭和三十五年版)も本書の序文に引用されている。ついで序説、参考文献の頭文字略号表、省略文字表、記号表と続き、本文(p.1-p.323)に入る。そのうち補遺があつて、索引部となつてゐる。この部分はアルファベット順索引、大正蔵経本と南条文雄目錄対照表、テキスト順題目表(1.佛典、2.道教、3.雑本に大別し、例えば佛典の場合、やうに 1. Canon Bouddhique, 2. Textes inclus in Taisho Issaikyo, Volume 85, 3. Préfaces, 4. Commentaires de Sūtra, 5. Commentaires de textes de Vinaya, 6. Commentaires de textes D'abhidharma, 7. Autres Commentaires Bouddhiques, 8. Compositions Bouddhiques, 9. Gāthā et Pièces poétiques, 10. Dhāraṇī, 11. Buddhānāma, 12. Pièces de circonstance Bouddhiques, 13. Éloges, 14. Éloges funebres, 15. Notes Bouddhiques, 16. Fragments Bouddhiques, 17. Textes Bouddhiques non identifiés と十七項目に細分されてある)。奥書、紀年、年号別などの分類索引、挿図という具合に、どの分野からでもすぐ検索できるよう便宜がこらされてある。

本学にはつとに大正十五年に架蔵せられた Collection de Pelliot Manuscrits de Touen-houang : Nos. 2001-2520, 2521-2614, 2615-3511, 4500-4521 (catalogue) [p.1-p.117]があり、ペリオ文書個別のおおむその名称がわかるようになっていた。

タイプ印刷と書き入れとをまじえた手控え程度の目録と思われものである。そのうち陸続と敦煌関係の文献が本学に収蔵せられてきており、本書の序文でふれてある文献はほとんど現存している。それらを参考にして本書について逐一紹介すべきであるが、紙数の都合もあることゆえ、わたくしがかねてからつけた研究に関連するものを数点とりあげ、もって全体を紹介するよすがにしたいと思う。

本文はペリオ蒐集整理番号にしたがい、一つの文書ごとにきわめて具体的に記録してある。まず卷子本か冊子本かなどという書物の体裁をのべたのちタイトルを出す。それが数種の文書の合成の場合はナンバーを付して一々説明してある。つぎに完本か断簡かを明記し、佛典の場合は大正蔵所収簡処を明示してある。また関連文献(研究論文も含む)中の引用場所を示し、文書の様態、すなわち書体、書の大小、印記、紙質、文書の大きさなどを詳述してある。なお紙背文書(Verso)あるいは断片文書(Pièce)についても右のような要領で綿密な記録をはかっている。これまで世にでたペリオ文書目録をはるかにこえたすぐれたものといつてよろしく、編集者たちの積年の労苦のほどがよく偲ばれる。

当面わたくしの関心のある文書のみをみよう。まず本文288は「降魔変押座文」一巻の完本となっている。首題は「破魔変一巻」、奥書は「天福九年十一月十日。浄土寺法律願榮。」と二行三十八字をもって誌してあるという。尾題は「破魔変文」と付され、ついで「四獣因縁」の全文、それから未完の佛教経済

文書とつづいて、この三者を合巻した文書であると記録してある。その王重民編「敦煌変文集」をひもとくと、奥書は、

天福九年甲辰祀黃鍾之月蕤生十葉冷嶽呵筆而写記

居淨土寺釈門法律沙門願榮写

の二行三十五字となっている。本文の記録字数とまず合致しないことにつづいて、奥書がかなり異っているのをみいだすのである。もし「敦煌変文集」の記録が正しいものとするならば、この奥書をフランス語で表現しがたいために敢て簡潔に処理したのであろうか。すなわち本文は

Colophon : ((Copié par Le fa-lin 法律 Yuan-jong 願榮 au monastère Tsing-tou 淨土, …… le 10<sup>e</sup> jour du 11<sup>e</sup> mois de la 9<sup>e</sup> année tien-fou (28 nov. 944),))

とわざわざ漢字を挿入してまで表記してあるので、まんざら奥書を正確に表記するのを無視し省略したものは思えない。また王重民も自からパリ国民図書館へリオ文書を写した目録に、  
2187. 1. 敦煌変一卷米函：「天福九年甲辰祀淨土寺門願榮写。」  
2. 四獸因縁

と記すのみで、これもあまりにも簡略にすぎ、あまつさえ本書よりも具体性に乏しい。かようにみえてくるとやはり本書のほかに原本をあわせみるよりほか文書の真相を知ることができないわけである。かくて目録という性格をもったものの限界を知るとともに、目録のみで原本の実体を伝えることが甚だ困難な仕事であるのを知る。しかし書誌学的面からすれば本書は甚だ有

益な資料をわれわれに提供してくれる。つきに本文2292の

Missive de salutation écrite par le moine Tsing-T'ong

寫通, maître (yuan-tch ou 院主) du P'ou-hien yuan 寺

院, probablement a l'occasion du nouvel an.

から「敦煌変文集」や那波利貞博士論文「中晚唐五代の佛教寺院の俗講の座に於ける変文の演出方法に就きて」所引の

普賢院主比丘靖通

右靖通謹祇候

起居陳

賀

院主大徳謹狀

正月 日普賢院主比丘靖通狀

とある全貌が把握できない。ただ新年に際して書かれたであろう挨拶の書翰というこの文章の内容が説明されてあるのみである。王重民の目録は例によってこれよりなお簡略である。またこの文書には奥書があり、そのうち草書の体で十八字の文章があるが、その一部について本書は記すのみで、それぞれ書法が異なることなど些かもふれていない。やはりここにも原本をみるよりしかたないことを知らしめる。編者は王重民の「敦煌変文集」、那波博士の論文をたしかに参照して目録を作成している。したがって文書中の文章についてはむしろそれら参考文献を披見するのを予想し、文書の体裁をよく表記することに努力したとも考えられる。それならばもし参考文献中に誤謬がある場合はその補訂をするなり、あるいは注意を促す配慮がほしかった。

つぎに本文332<sup>14</sup>「釈迦譜」と題す。そののち詩と散文とがある卷子本で、首尾を欠いていると説明してある。しかも参考文献をあげ王重民はこれを「難陀出家縁起」と題していることにふれているが、編者はなぜ「釈迦譜」とみなしたかの説明がない。さらにいま一つの参考文献に「CKK, 13, ff. 57-72」をあげているが、はじめに列記してある参考文献略号表中にはみ

あたらないものである。もしかすると「BKK」すなわち「佛教研究」であるかもしれないが、見逃せない誤謬ではある。つぎに本文は各詩の欄外に「断」「吟」の文字が記されてあるという。試みに「敦煌变文集」をひらくと、「断」「吟」の文字が布置されてある状況がよくわかる。したがって目録中に明示してある参考文献を必ず併用してこそ、本書はより有効に機能を發揮するということになる。しかし参考文献を伴わない文書の実体はやはり原本をみるよりほかない。すなわち佛典の場合、所収大正藏經卷数を記してあるが、経文の校勘は不可能なのである。さらに問題は *Varso* (紙背文書) である。3324の場合、佛教逸話と説明してある。この説明をみるとわれわれは興趣をいだくのであるが、その文章がどういう内容のものであるかわからない。さいわい那波博士の論文に引用されてあるので、その全貌がわかる。しかし博士も手控え程度に写し帰られたものであるから信憑性が十分であるところまでいかない。やはり自己の眼で原本にあたって真相をつきとめてこそ、もっとも正確な文献資料として文書は最大の効果を發揮するわけである。いずれにしても原本が何らかの姿でわれわれの目前にその全貌をあら

わしてくれるのがもっとものぞましい。現在この道の研究者がペリに渡って交渉をなされたと仄聞しているので、こんこの公開が待たれるのである。

以上のべて来たように本書はあくまで目録の範囲内で表記しようの努力を尽したものである。そして佛典を主として中国古典にまでおよんだ幅広い文書を一一よく眼を通して記録され、書誌学的に甚だ有益である。しかし本文校勘には残念ながら原本の公開を期待するほかない。ペリオ文書の一部は写真でみられないことはないが、なにせペリオ文書は他の蒐集敦煌文書に比較して質的にきわめて高いものであるという。いわば敦煌文書の精髓と目されるペリオ文書がマイクロ・フィルムなら申分ないが、文書解説の形ででも一日も早く全部公開されれば、いわゆる佛典を含めた敦煌学はまた新たな展開をなすという夢をいだかせる。こんなかいます一冊が完成した時点での読後感をべたのであって、こんご第二巻 (Nos. 2501-3000) 一九七四年刊行、第三巻一九七六年刊行と全体で六冊におよぶとの予定なので、その時わたくしの見解も自から異ってくるものと思う。しばらく本書と本書中に記載されている関連文献を併用して研究をすすめるほかあるまい。なお、ペリオ文書中にあるチベット文字本はこんごの目録に記録されるものと思うが、この目録には記載されていない。ただ

M. Lalou: Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-

houang conservés à la Bibliothèque nationale (Fonds

Pelliot tibétain), 1961.

がすでに出版され、ペリオ文書中から二千二百十六点のチペツト文字本を整理してあることを付記する。

かくて現在のぞめるもう一つは、本書を取扱って研究を深めていくものにとって、その過程に於てどうしても原本を閲覧する必要が生じた場合、本書の目録ナンバーを明記して適当な機関を通してその写真を手でできる道が開かれているので、大い

に利用され学会に寄与されることを期待したい。非常に大まかな紹介に終ったが、研究者は関心のある個々の文書についてさらに本書を検討されご教示を賜わらばさいわいである。

(25x16cm: Vol. 1, Nos. 2001-2500 Publié avec le concours de la Fondation Singar-Polirac, Paris-Bibliothèque Nationale, 1970.)